

レオ13世からレオ14世へ

主任司祭 フランシスコ 山口 一彦

1985年に公開された『法王の旅』というアメリカ映画があります（日本では以前、パパ様のことを「法王」と訳していましたが、このような標題になっています）。簡単なあらすじは、こうです……バチカン宮殿での堅苦しい生活に嫌気がさした教皇は、ある日、監視の目をくぐり抜けて脱出し、身分を隠したまま、庶民の暮らしの仲間入りをする。やがてイタリアの片田舎の寒村に行き、貧困に苦しむ荒んだ生活を送る村人の心を救う。さらに、その土地の教会も再建する。こうして人々の心を開いていくうちに、教皇自身も天から与えられている自らの使命を見出していく……というヒューマン・コメディの傑作です。なんだか、諸国を旅しながら悪者を退治していく水戸黄門様みたいですよね。もちろん、フィクションです。バチカン宮殿から抜け出して旅をした教皇様なんて、いる訳ないですもんね。でも、テレビドラマ水戸黄門に徳川光圀という実在のモデルがいたように、この映画の教皇様にも、モデルになった実在の教皇様がいます。それがレオ13世です。教皇在位は1878年から1903年です。百数十年前の方ですね。



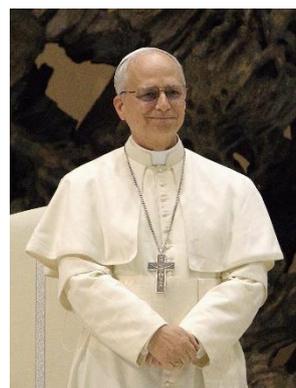
第256代教皇レオ13世

レオ13世の前任は、ピオ9世という教皇様でした。この方は、産業革命から続く社会の近代化と科学思想への傾倒を、全面的に否定しました。そうすることで、聖なる教会を世俗化から守ろうとしたんですね。でもその結果、一般社会とカトリック教会との間に、大きな隔たりと対立が生まれてしまいました。そのあとを引き継いだレオ13世は、信仰と科学、教会と一般社会との共存を訴えました。特に有名な業績は、『レールム・ノヴァールム』（ラテン語。日本語では「新しき事柄について」）という回勅を發表したことです。産業革命によって生じた労働問題を扱ったものです。労働者の人権を擁護し、搾取と行き過ぎた資本主義に警告を発しながら、その一方では、当時台頭しつつあった共産主義を厳しく批判しています。それまで回勅というのは、信徒が教会内で回し読みするもの、つまり教会内部に向けて書かれた文書でしたが、この回勅によって、カトリック教会は一般社会が抱える社会問題にも積極的に関わっていくと

いうことを、初めて表明しました。そこでこの回勅は、カトリックの「社会教説」（様々な社会問題を取り上げ、信仰と教義に照らしながら、その問題をどう捉え、解決に向かってどのように取り組むべきかを示した文書群）をスタートさせたものとして高く評価されています。このような功績を讃え、尊敬と親しみを込めて、前述の映画『法王の旅』が作られたんでしょうね。

世界の政治・経済・環境などの問題に対して積極的に発言を続けたフランシスコ教皇様が天に召されたあと、その反動として保守的で内向的な方が次の教皇に選ばれるのではないかと、という憶測が世界中を飛び交いました。しかし、コンクラーベで選ばれた方は、本命どころか対抗馬でも大穴でもなかったアメリカ人、ロバート・フランシス・ブレヴォスト枢機卿様でした。聖霊の風が吹いた、としか言いようがありません。彼は教皇名をレオ14世としました。もう、お分かりですよね。新教皇様は、「レオ13世から始まりフランシスコ教皇様まで続いてきた近代現代の教皇様たちの遺志を、そのまま受け継ぐ」と、教皇名によって宣言したのでしょう。

ややもすると私たちは、教会での信仰生活と、学校、職場、そして家庭での日常生活とを、切り離して考えてしまう傾向があります。「聖」と「俗」とを別々に考えてしまう訳です。でも教会は社会の中であって、内側から「聖」なる生き方と考え方を広めるべきでしょう。教皇様がただ一人で頑張っても、社会は変わりません。教皇様はバチカンから全世界に向けて、社会が進むべき方向を示されます。私たちはその思いをくみとって最前線に立つよう、イエス様から命じられています。主日ミサのたびに、御言葉とご聖体で浄められ、カづけられて、派遣されます。そして、亡くなる前日まで働き続けたフランシスコ教皇様のように、生涯にわたってイエス様の弟子としての使命を果たしていくのです。私たち一人ひとりの生き方が、少しずつこの社会を聖化します。私たちの使命は、なんと素晴らしいことでしょう。



第267代教皇レオ14世